

## 「戦争や原爆の事実知り、感じたこと伝えて」

### 広島別院で平和を語る集い

「非戦・平和を願って70年」をテーマにさまざまな取り組みを行ってきた安芸教区は、6月27日にシンポジウム「平和を語る集い」を広島別院（広島市中区）で開いた。

映像作家の田邊雅章さん（77、西向寺門徒）が制作した、原爆ドームとその半径1キロ以内に暮らしていた人々の営みや町並みをコンピュータ・グラフィックスで再現した映像と、約100人の被爆証言を紹介した記録映画「知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」を上映後、田邊さんの講演を聞き、非戦平和への思いを新たに

した。

田邊さんは、生家が広島県産業奨励会館（現在の原爆ドーム）

で下前と直後を知る数少ない体験者として、



何も知らないまま「くくなった」という事実を知ってもらいたい」と訴えた。

同教区は毎年、世界に向けた平和の発信として宗門校・龍谷大学への留学生を迎えた平和プログラムに取り組んでおり、留学生たちは同シンポジウムにも参加。講演後

あり、信仰に助けられた。「私たちは何をすべきか」と質問し、田邊としたこともあったさんは「戦争や原爆のが、それを止めてくれ、事実を知ること、そして、仏さまであり、て、自分に置き換えて祖先に対する思いがある、そこで感じたことだから」と語った。とを伝えてほしい」と

さらに、「広島」と答えた（写真）。

中国からの留学生・生富文さん（3年生）は「ヒロシマに来て心がゆさぶられた。戦争争を体験した者としてと原爆は人々の心と体に深く消えない傷を残さ、不安を感じる。戦史を繰り返さないよう争を知らない人は、戦に次世代へ語り継ぐ争も原爆も過去の出来事としてしか捉えることができない。原爆が落ちる前には街が崩壊が落ちて、暮らあり、人がいて、暮ら返り起ころないよう世界平和実現への道を共に歩みたい」と感想を話した。